



全村博物館構想と地域再生 : 長野県阿智村 (〈特集〉 地域の再生と歴史文化)

岡庭, 一雄

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 2:26-38

(Issue Date)

2010-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81002372>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002372>



全村博物館構想と地域再生 長野県阿智村

岡庭 一雄

はじめに

昨春秋のリーマンショック以来山村の疲弊は加速的に進んでいる。農山村が大きく人口減少をきたしたのは、一九六〇年代の我が国の高度成長初期であるが、現在の減少はそれに匹敵する状況である。

さらに、深刻なのは、少子・高齢化が進んでいる下で、社会減が広がってきていることである。これまで農村地域においては、製造業や観光業が農林業に代わる働き場をかううじて提供してきた。しかし一九九〇年代後半より始まる経済のグローバル化や、景気後退による国民生活の悪化により、下請け産業に頼る製造業や観光業が後退を続けてきた。その下での今回の不況である。働き場が失われ、働き盛り・子育て世代が農山村から流出することとなった。ただでさえ少なくなっている集落等

の後継者難を一層促進し、集落の崩壊を招いている。

山村の崩壊は、単に山村地域に暮らす人々の問題に留まらない。都市の問題でもある。農山村は下流に水や食糧、木材を供給してきた。その供給源を失うこととなる。上流部の山林や河川の管理が不十分であれば、下流域の都市に災害をもたらすことにもなる。

また山村集落が消滅することは、集落の人々によつて連綿と受け継がれてきた固有の文化遺産が失われることでもある。阿智村の位置する長野県伊那谷では多くの集落で、集落特有の祭りが受け継がれ、「祭りの谷」として多くの人の注目を集めてきた。しかし集落の疲弊とともに、これまで受け継がれてきた伝統的祭りの灯が、ところどころで消え始めた。

もちろん、こうした地域においても、現在多くの人々が暮らしており、暮らし続けたいと願っているのである。それぞれの地域において山村集落に暮らす人々の生活維持のための施策を



講じてはいる。しかしそれでも山村の荒廃は進んでいるのが現実である。後継者の不足や、有害鳥獣の被害は拡大の一途をたどっている。

小泉構造改革以来、国の地方政策は、財政の「三位一体改革」に見られる地方への国費の歳出削減や小規模自治体潰しであった。市町村合併が推進され、地方分権のかけ声とは裏腹に地域の総体的な弱体化が進められた。

現在、国は「地域主権」を掲げている。国と地方の役割を明確にするという目的の下で道州制導入や基礎自治体の大型化を進めようとしており、さらに新たな市町村合併が考えられているのではと危惧せざるを得ない。国に都合の良い効率本意の自治体運営を求めるな

ら、山村集落は結局置いてきぼりにされざるを得ない。我々が望むものは、こうした「地域主権」ではない。住民の暮らしに対して国の役割を明確にし、その上で地域の自主、自立を進めることであ

る。「地域主権」という曖昧な言葉でなく、「国民主権」「住民主権」の完全実施による地域政策である。

以上のように、地域を取り巻く現状は大変厳しい。しかし、こうした状況においても、地域の維持、再生をかけた活動は全国で行われており、主体的に地域を担う人々が着実に増えている。

地域の維持、再生にあたっては「地域に生きる誇り」が重要な鍵を握る。明治大学教授の小田切徳美氏は、集落崩壊のプロセスを「土地の空洞化、人の空洞化、誇りの空洞化」とであると述べている。地域に生きる力の源は、その地域に生きる人々が持つ地域の誇りであり、誇りをもてるか否かが集落の崩壊に深く関わっているというのである。「自分の生きている地域はつまらないところだ」「良いものは何もない」と思っていれば地域をつくっていく活力が失われ、地域の衰退は免れない。地域維持、再生の活力はそこに住む人々が、地域の守るべきものを発見し、それを地域づくりの糧としていけるかどうかにかかっているといっても過言ではない。なぜなら、人々にとって生き甲斐や幸せ感は、彼我との関係において自分の価値を相手に認められるかどうかに掛かっているからである。

本稿は、阿智村において進められている村の地域資源を地域づくりに活かしていこうとする住民の取り組みの一端を報告するものである。

一 東山道古文学推進協議会の発足

古代東山道は、近江の瀬田を起点に東北の多賀城まで続く、長さ一千キロメートルの官道である。途中西日本と東日本を分ける中央アルプスを越える神坂峠は、官道最大の難所とされてきた。この東側の峠のふもとが、本村の「園原」である。後に、木曾谷を通る中山道が開通するまで神坂峠越えは続いていた。「園原」は、西国の人々にとっては東国への入り口であり、東国の人々にとっては西国への入り口であった。

このため、峠越えの厳しさとともに「園原」の名は、当時の都びとも知られていた。例えば、源氏物語第二帖は、き木の章、枕草子等、平安時代を中心とする古文学にしばしば登場する。しかし、官道が木曾側に移るとともにいつしか「園原」の集落は衰退し、再び人が住み始めたのは江戸期であるといわれる。忘れられていた神坂越えの街道復活が行われたのは、明治に入ってから地元の里人有志の手によってであった。当伊那谷は「国学」が盛んな地であり、その影響は住民に及んでいた。この影響を受けた、地元の有力者であった熊谷直一氏を中心となつて古道の整備と史跡の復活に努力された。富岡鉄斎もこの地を訪ねている。しかし、その後は、歴史や文学に関心のある人の中では大切にされてきたものの、一般の住民の中では重要

視されることがなく過ぎてきた。再び地域の人々が関心を示し始めたのは、最近になってからであった。中央自動車道が神坂峠の直下をトンネルで通過し、園原はトンネルの出口となった。地元の強い要求で「園原」にインターチェンジができ、過疎化が進んでいた地域の再開発が地域の人々の手で進み始めた。地区住民によって地区の開発を推進する「智里西地区開発組合」が設立され地区の開発計画の検討が進められた。

開発の柱は、地域の持つ自然資源と「園原」を中心とした歴史資源を活用したものであった。特に、「園原」については、立教大学の観光学部溝尾教授に依頼し、「史跡活用マスタープラン」の提出を受けた（一九九六年）。園原部落の若い人が中心となつて「園原会」を組織し、史跡保存に取り組み始め、次第に地域の人々も関心を示し始めることになった。しかし、直接的に経済効果に結びつかない史跡保存は、多くの人々に認識されるほどの状況を作り出すことができずに推移した。一方、村内に昼神温泉が湧出し十数年を経過し、温泉を中心とした観光から新たな観光振興のための村内の観光資源発掘が旅館経営者の課題となっていた。「園原」は観光資源として着目され始めることになった。

それと時を同じくして民間の企画会社より、二千年ミレニアム事業としてかつて発行された「園原万葉集」発行の企画が持ち出された。これに取り組むかどうかの検討が、郷土史や文学

に感心のある住民の中で始められることになった。この企画は経費等の問題で中止されたが、このときに集まった人によって「東山道古文学推進協議会」が設立され、改めて東山道と園原の研究を行うことになった。二〇〇一年四月には瀬戸内寂聴氏の「源氏物語」についての講演会を行い、山深い廃校に千二百人の参加者を集めた。秋には、全国の東山道研究者も参加した「東山道」全国サミットを開催し、さらに田辺聖子氏の講演会を行った。

瀬戸内寂聴氏の講演実現には、「園原」の持つ宗教的史跡としての背景がある。天台宗の開祖最澄が、東方巡錫のおり、神坂峠越えの難儀を救うため峠の麓に美濃側と信濃側（園原）それぞれ広済院、広拯院の救済施設を建てられた。したがって園原は天台宗からも大切な地とされ、地元の僧侶を中心に史跡は守られてきていた。一九九五年には、伝教大師立像の建立が行われ、建立式には座主も来られる等、あらためて宗教史跡としても注目をされる場になっていたのである。その後、昼神温泉の旅館経営者が中心となり、史跡の整備が進められた。二〇〇〇年には、天台宗から「信濃比叡」の称号を許可され、二〇〇七年には、「信濃比叡広拯院」の堂宇が建設された。瀬戸内寂聴氏は、信濃比叡の称号授与を祈念した碑の除幕式に天台宗の僧侶として参加したのを機に講演会となったのである。前年の二〇〇七年四月には、信濃比叡広拯院本堂が竣工し、天

台座主を迎えて落慶祝賀会が行われた。同伴した瀬戸内寂聴氏の講演会も行われた。

二 全村博物館構想誕生

二〇〇二年の一〇月には、民俗学者谷川健一氏の講演会を開催する等、東山道と「園原」の研究と史跡の持つ重要性の認識を共有化する事業が矢継ぎ早に展開された。このように、学術的な活動、観光振興、宗教活動に加え神坂越えウォーキングや地元住民による史跡保存活動等が「園原」を中心に展開され始めることになった。こうした状況を受け、これら活動の中心になった人々によって恒常的に東山道の研究と史跡保存、活用を進めることを目的として、NPO法人東山道「神坂総合研究所」が設立された（二〇〇三年）。

このように様々な方面の「園原」史跡の保存活用の動きが活発になってくる中で、「園原」の史跡の説明や遺物（神坂峠等の発掘調査による遺物等）展示のための施設建設が計画され始めた。そこでNPO「東山道神坂総合研究所」の設立総会において、国立民族学博物館の石森秀三氏による「地域ぐるみの博物館が阿智村の未来を開く」と題する新しい考えに基づく博物館のあり方についての講演会を開催した。

園原に「園原」を全国に向けて発信するための施設を建設す

る必要があることは、かねてより村の課題となっていた。しかし、村の財政問題とは別に、村民合意が得られずに推移していた。その背景には、「園原」の史跡的価値に対する認識の浅さばかりでなく、当時盛んに行われていた箱もの行政批判や、村の中心部に資料館の建設をというような村民の中には根強い反対論があった。こうした村民の中にある様々な意見を収斂させて園原に「園原資料館」建設を進めるためには、村民間で改めて村内に点在する様々な歴史遺産の保存活用について議論を起しながらか進めていくことが必須条件となっていた。

石森氏の提案は、そうした問題の前で立ち往生していた施設計画を進める人々にとつて目から鱗が落ちるものであった。村のすべてが保存すべき、また学ぶべき、あるいは活用すべき文化財であるとする概念、それを担うものは村民自らであるという考え方は、阿智村が進めている村づくりの基本と完璧に一致するものであった。

石森氏の講演の後行われた討論の中で、「園原」に特定して資料館を建設するというところにこだわらないで、全村の歴史、自然、生活文化を丸ごと博物館化していく全村的な取り組みの中から、改めて「園原資料館」を考えてみるのが早道ではないかという方向が次第に確認された。村にある、全国区で通用する「園原」を屋根のない博物館とし、全村の博物館のフィールドに誘う案内所として資料館を位置付けることが阿智の価値

を高めることになる」と云うことがだんだん理解されるようになっていったのである。

以上の経過を踏まえて、これを「全村博物館構想」と名付けた。阿智村版エコミュージアム構想がスタートした。村全体の課題として進めるために文化財委員会に諮って、委員も加わって村づくり委員会「全村博物館構想策定委員会」が発足した。二〇〇五年九月の村議会九月定例議会の冒頭での村長挨拶で私（岡庭）は次のように語っている。『住民の皆さんが、この地域で生きること誇りを持ち、心地よい充実感や達成感を体験する、社会の中で自分の存在感を実感できる機会や場所を提供する等住民の皆さんの活動できる条件を整えることが行政の役割であります。現在住民の皆さんからは、歴史資料や史跡の保存、植物や自然景観の保存等の要望があります。こうしたものをしっかり守っていくことによって、地域のアイデンティティや誇りが生まれると思います。また、様々な分野で活躍する人、特技ある人がおります。こうした人を知り、かかわりを持つことで自分も何かをやってみたくなることがあります。『全村博物館構想』は、こうした機会を提供するものとして提起したものであります。この考えは、フランスのアンリ・リビエルが提唱したものであります。彼は、「エコミュージアム」（生活・環境博物館）とよび、エコミュージアムの三大任務について次のように述べています。1、エコミュージアムは、地域住民の学

校である。2、自然と文化の保護センターである。3、地域発展の道を求める研究所である。すでに村づくり委員会の中に「全村博物館構想策定委員会」が立ちあがっております。また、園原へ計画する「インフォメーションセンター」と阿智村における史跡保存を含む博物館構想について調査委託をNPO法人東山道神坂総合研究所にお願いしており、ご提案をいただくことになっております。今後、意識的に村の様々なところでこの問題について議論を深めていただき、阿智村らしい構想を樹立し計画的に実現を図ってまいりたいと考えます。』

ここで述べているように、村は、計画の具体化を進めるにあたって、東山道神坂総合研究所に次の項目に沿っての調査を委託した。①園原の里のコンセプトとランドデザインの策定②園原の里を活用するソフトづくり③資料館（インフォメーションセンター）の展示内容とマネジメント④東山道「古道」調査の進め方⑤全村博物館構想との関連についてであった。

三 はつき木館と全村博物館構想

委託調査は、東山道神坂総合研究所理事長の羽場睦美氏が中心となって進められた。羽場氏は、村づくり委員会「全村博物館構想策定委員会」の事務局も担っていた人物である。先述した経過も踏まえる中で、全村博物館構想調査を先行させた。エ

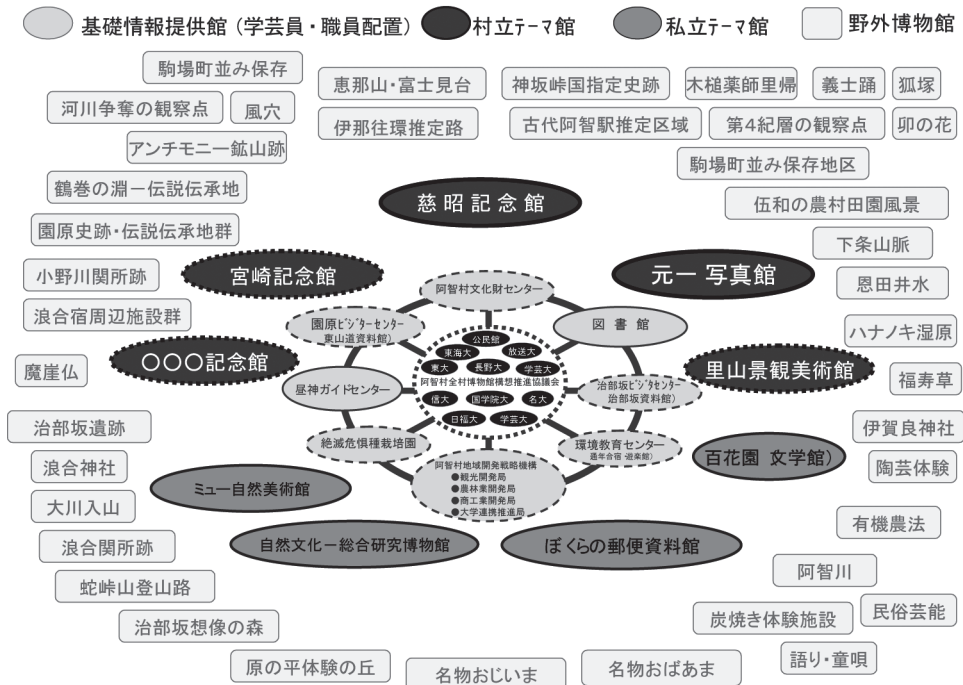
コミュニケーションの先進地であるイギリス、フランスの視察を行った。この過程で、羽場氏と横浜国立大助教授でエコミュージアム研究の第一人者である大原一興氏との交流が始まり、二〇〇五年一月に大原氏をメイン講師に第一回全村博物館構想シンポジウムが開催された。大原氏は講演の中で世界のエコミュージアムの動向と日本における動きについて話された。講演の後には村内各地で取り組まれている自然や歴史保存の実践発表が行われた。この会で策定委員会より構想推進に向けての提言が行われ、今後はこれに向けて進んでいくことが確認された。

同時に、「園原」に関する調査も進み、二〇〇六年三月に報告書が提出された。続いて策定委員会より全村博物館構想に対する提言書が提出された。

行政においても二〇〇六年度より、これらの報告、提言に基づく具体的な取り組みが進み始めた。資料館建設については、村内での論議の末「園原ビクターセンター」として園原の中心部に建設することが決定された。施設内容については、調査報告書を基本に研究が行われた。二〇〇八年四月に園原ビクターセンターが竣工、名称を募集した結果、「はつき木館」としてオープンした。

「はつき木館」の開館を機に学芸員の採用を行い、「はつき木館」の運営と全村博物館構想のコーディネーターの役割を担わ

阿智全村博物館構想の全体連携構造（案）

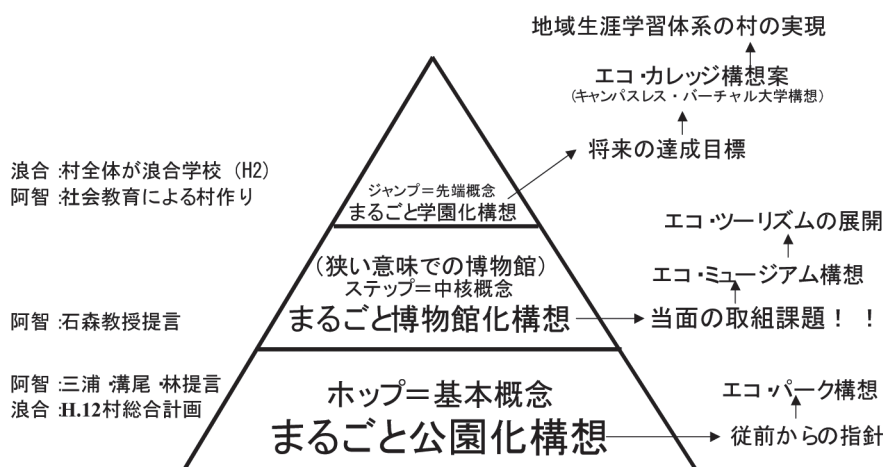


せることとした。「はゝき木館」が出来たことで全村博物館構想の支援施設が一つ完成したことになった。全村博物館構想への入り口の役割を果たすため、年何回か村内の遺物等の企画展を行う等、構想が一步進むことになったのである。はゝき木館に常時案内人がいることで園原を訪れる人が着実に増えている。

このように、園原に対する関心の高まりは、園原を中心に様々な活動を誘発した。樹齢五〇〇年以上ともいわれる「駒つなぎの桜」は、桜ブームも手伝ってカメラ愛好者が年々増え多くの人々が訪れるようになった。たまたま建設予定地の発掘調査で、中世の鏡が出土したのを機に、過去の出土遺物の鑑定が行われた。これをきっかけに地元神社の鏡が県宝に指定申請するということ幸運にも恵まれた。古文学に対する関心も高まり、過去に演じられたといわれている狂言の復興が計画され、瀬戸内寂聴氏の書き下ろしで狂言「木賊」（とくさ）が復活された。この狂言は、落慶祝賀会の中で人間国宝茂山千作一門により初上演された。さらに古道東山道を歩く神坂峠越えウォーキングが中津川市との共催で行われ両市村で古道保存が進められ始めた。

四 地域づくりと全村博物館構想

全村博物館構想 → 3層構造



「園原」の史跡保存と活用を巡る動きから生まれた全村博物館構想は、当初これらの活動に参加した一部の人の関心事に過ぎなかった。

村では平成二〇〇九年度から始まる第五次総合計画の村づくりの柱に「全村博物館構想」の推進を据えることとした。第五次総合計画が掲げる村づくりの目標は「一人ひとりの人生の質を高められる持続可能な村づくり」である。これは、全ての住民が、自分の人生はもとより地域をつくる主体として生きていく、これを可能にする地域社会をつくることを基本とした村づくりである。全村博物館構想の理念は、これを具体的に表現したものである。自分や自分の住む所の価値を他者との交流によって自覚し、さらにそれを高めていくことにより、主体的に生きる力を高めていくとするものである。こうして主体的に地域づくりに住民が取り組むことで地域の持続が可能になると考えたものである。

全村博物館構想を『構想』として、全村博物館『つくり』としないことにしたのは理由があった。それは、それぞれがこの理念を主体的に実現させていこうとするその過程を大切にしたいと考えたからである。全村博物館『つくり』と呼称した場合、全村博物館をめぐる議論が施設論に矮小化し、どのような博物館をつくるのかという、出来上がった形を想定するところに留まってしまうことが懸念されたからである。



村の総合計画に全村博物館構想が目指す方向として正式に掲げられると、当然住民の中からこの構想に対する疑問や意見が出されることになった。様々な疑問や意見が出され議論が行われることこそ「構想」としたねらいでもある。施設をイメージした人、文化財の保護を考えた人、自然の保護を考えた人等様々であった。村議会議員間でも全村博物館構想についての研究会が生まれ、村内の神社の由来を調べる等実践をおとして構想を理解しようとする取り組みも行われた。総じて「館」という言葉から形にこだわるが多かった。しかし、行政としては、具体的な一定の方向を出さないで思い思いに、構想の理念に沿って行われる住民の実践を人的にも財政的にも支援することとした。現在もこれが全村博物館であるというものは存在しない。心ある人々が思い思いに様々なことに取り組んでいるのである。

例えばある集落では、集落の高齢化が進み、集落の維持が危うくなっている状況をふまえて、集落の良さをみんなで見直そうと、集落をかつて貫いていた三州街道（名古屋から塩尻までの街道で、中馬街道、飯田街道等と呼ばれる）の復活を計画した。崩落箇所の修繕や案内板の設置に集落をあげて取り組んでいる。また別のある集落では集落内にある座禅草群生地の保存に取り組んでいる。春には座禅草祭りを開催し、集落外の人々に群生地を訪れてもらうとともに、集落でとれた野菜等の直売を

行う等の取り組みが始まっている。

このように集落にある歴史資源や自然資源を集落のお宝として保存するのみでなく、集落外の人々に見たり体験したりしてもらう取り組みが各地で行われている。この取り組みにより、集落の価値を認識し、改めて集落で暮らす意義を確認する結果を生んでいる。こういった村内各地であらためて全村博物館構想を意識したのではない、住民の地道な活動の集積が全村博物館構想の基となっている。

五 全村博物館構想の今

阿智村では、住民が主体の村づくりを進める仕組みとして、村全体にかかる課題について住民が主体的に取り組むために、五人以上の住民によって課題の学習や実践を行う「村づくり委員会」と地域的な課題に取り組む「地域自治組織」がある。これらの活動については村が財政や人的支援を行っている。先に記した「全村博物館策定委員会」もそのひとつである。これらの組織は、ただ要求を村に出すということにとどまらず、その要求実現のための研究を行うとともに、要求実現後の運営等にもかかわることとしている。

地縁組織としての自治組織は、明治以前の自然村単位の組織、合併以前の旧村を単位とする組織等、それぞれが任意に組織し

たものがある。村の行政は、それらをその地域の多数の住民で構成された団体として、地域に関係する事項の意志や要求等について重要視することとしている。

自治組織の活動には、当該地区住民の安心、安全を確保することや、環境整備、生き甲斐づくり等の活動の他、祭りの継承や文化財の保存等がある。中でも少子化、高齢化が進む現在においては、地域の再生、元気を取り戻すことが重要な活動のひとつである。

例として、村の中心部に位置する駒場自治会の活動を見てみる。駒場地区は、旧三州街道の宿場として栄え、周辺地域の商業の中心であった。しかし国道のバイパスが別ルートに移り、と同時に、大型小売店が隣の飯田市郊外にできた。加えて周辺部の過疎化が進行し、急激に消費が落ち込んだ。これにより駒場地区の商店は消え、寂れた街並みが残されてしまっていた。

そこで駒場自治会は自治会の事業としてそこに住む人と共に駒場の街並み再生をはじめた。これは自分達の住んでいる所を人々が行き交う元気な所にしたと願う地域の人々の思いを基にしたの取り組みである。まずは地域の住民が、街を歩いて良さを知ることから始められた。これにより周辺の人々が集まりにぎわっていた頃の料亭の建物、古い銭湯等、風情の残るこの地域の魅力を再認識することが出来た。この町並みを残しながら賑わいを取り戻す取り組みがスタートした。最初に取り組ん

だが、街道沿いの空き店舗を活用した主婦の店であった。この取り組みで好感触を得た女性の手によって、街道沿いの家にひな人形を飾って「おひな祭り」を三月に行う取り組みが始まった。この取り組みは二年後には、飯田街道ひな祭りとして広域的な祭りに発展し、多くの見物客が訪れるまつりとなった。現在、駒場自治会は、古い建物の調査や保存についても東京大学の研究グループと共同で取り組んでいる。古い街並みを残しながら安全で安心な町づくりを構想している。

駒場自治会で見たように、各自治組織では、それぞれの地域の特色を生かした地域づくりに取り組んでいる。地域の歴史や自然を守ることも多くなり、地域の歴史マップづくりや、「区史」をつくる所も出てきている。

昨年三月阿智村と合併した、旧清内路村は、人口減少と財政不安により編入合併を選択した。清内路には上清内路、下清内路の二地区があり、それぞれの神社に毎年秋に奉納する「手づくり花火」が地域の若者によって受け継がれてきている。長野県無形民俗文化財に指定されている花火は、上清内路、下清内路、それぞれ花火の上げ方や形が異なり、それぞれが競い合っていて守られてきている。花火の製造から打ち上げまで地元の人々が行っている。火薬取り扱いのための資格を取得し、一ヶ月以上前から毎夜集まって準備をして祭りを迎えるのである。花火の打ち上げに観覧料を取ったらかとの声もあるが、「見せ

物ではない、奉納花火なのだ」と頑なに伝統を守っている地域である。過疎化が進む中にあってもこの祭りを支えるために、清内路に留まる若者がいる。この花火があることで地域の崩壊を防がれていると云っても過言でない。

このように、既に新しい地域づくりや伝統を受け継ぐ活動が全村で展開されてきており、こうした取り組みを結んでさらにレベルを高めていくことが全村博物館構想に期待されているのである。

公民館を中心に、村内の学習、文化、地域づくり等の団体や個人が、年一回それぞれの学習や文化活動等の実践を持ち寄り、住民自身が地域の課題を共に話し合う「社会教育研究集会」が開かれている。この集会で話されたことは、全村で取り組む課題となることになっている。全村博物館構想は、四年間連続して分科会において論議されてきた。

二〇〇九年夏、第四九回社会教育研究全国集会在阿智村を会場に行われた。全国集会的阿智村開催にあたっては、村内巡りツアーを集会開催中に企画することになった。全村博物館構想を推進してきた人々は、この機会に、村内各地で取り組まれている活動を結ぶことが出来ないかと考えた。そこでメンバーは二〇〇九年二月に開かれた第四二回阿智村社会教育研究集会・全村博物館分科会に、村内巡りツアーの具体的な取り組みについて提案した。分科会参加者を中心に、村内巡りについても論

議され、みんなで受け入れることが決められた。さらに、これを進めるため「あっちうち熱中人連合」を立ち上げることになった。

村が、総合計画で構想を提起してから二年を経て構想実現への具体的な取り組みがスタートすることになった。全国集会には、村内を六コースに分け、それぞれの地元の熱中人がそろいの黄色の法被を着て、自分の暮らす地域の案内を行った、文化財や自然景観、地元的女性がつくった郷土料理に、参加者は感動の言葉を残した。初めての経験は、地域の人々に新たな自信を与えることになった。

この取り組みの反省会では、全村博物館構想を進めるために、それぞれの活動を結んで情報交換を行うことが確認された。また、三州街道沿いの各自治会やあっちうち熱中人達が連携して保存活用を進めることになり「中馬街道」調査を一緒に行うことになった。

さらに、翌二〇一〇年第四三回社会教育研究会の分科会では、全村博物館構想推進のゆるやかな組織を立ち上げ、さらに連携を強めて進んでいくことが確認された。

こうして二〇一〇年四月四日熱中人連合を発展させて「全村博物館連絡会」の設立会が開催された。この会では、大原一興教授の記念講演、村外で地域の歴史保全に取り組んでいる団体の活動報告が行われ、連絡会の設立が決められた。

六 まとめ

二〇〇三年石森教授の講演での提言以来七年の歳月を経て、全村博物館づくりが一步づつ具体化に向けて前進することになった。この間、村内外の有識者会議を開催し意見聴取を行ったがその中で集約された意見は、「住民が主体的に取り組む実践を重視すべき」という考え方であった。その提言を守り、決して形や制度をつくることを急がず、住民の理解と参加者の数と熱が高まるのを待ちながら対応してきた結果、関連する地域づくりが全村博物館に収斂してくることになったのである。

公民館がそれぞれの活動のプラットフォームとなったことに見られるように、この活動は一面では、住民自身による地域を知る学習運動でもあったといえる。

先に述べたように、現在の山村地域は危機的な状況にある。阿智村も例外ではなく、地域の再生は重要な課題であるばかりか地域の存続が掛かっている。

地域再生には地場産業である農林業の振興は欠かすことが出来ない。しかし、農林業を取り巻く環境は価格の低迷で厳しい状況である。農産物や木材をただ素材で販売しては再生産すら補償できない。農林産物に付加価値を付けるため加工を加えることや直売方式で販売する等の努力が行われている。また、

農村体験や自然資源を活用した交流人口の拡大を進めている所もある。これらの試みは限られた地域資源や地域に落とされるお金やものを地域内で循環することで地域再生を行おうとしている。このようにお金やものの循環による地域内再投資力を向上させることがなくては、地域を持続させていくことはできない。

これを担う人々の継続は欠かせない条件である。人はそこで暮らしていくために何らかの意義を感じなくては住み続けようとしなない。お金やものの多さもひとつの条件であるが、幸せ感や生き甲斐もまた大きな位置を占めるものである。人は、自己決定の幅や量が大きいほど幸せを感じ、人から尊敬されるほど生き甲斐を感じると云われている。全村博物館構想がねらうところもここにある。政治や経済が経済効率主義で進められている現状の中で、山間地域は疎外された状況にある。しかし、そこに生きている人々は、地域に生きる意義を感じて頑張っているのである。

もし、この人達の頑張りがなかったなら、山村の集落は急激に崩壊を見せるに違いない。先に記したように、山間集落の崩壊は、国土の荒廃を招き都市に対して直接的な被害をもたらすことになるが、それ以上に我が国の文化を創ってきた文化の源を失うことで、人としての正常な発達に影響をもたらすことになるに違いない。

本稿で述べてきたように、本村における全村博物館構想の進展は今緒に就いた所である。全国には、山形県朝日町をはじめエコミュージアムに取り組んでいる自治体は多く、街並みや産業遺跡を保存し活用に成功している事例も多い。全村博物館構想は、村にある歴史や自然に留まらず在るもの全て、観覧等の対象となるものであり、一人ひとりの村民が村民学芸員として活躍することである。

住民自治は住民自らが地域を治める制度である。地域の現実を見極めながら、新しい時代の担い手になっていく活動もまた博物館構想の大きな目的である。阿智村は、これを決して焦ることなく、身の丈に合わせてゆったり、じっくりと進めていくとしているのである。